

「底が突き抜けた」時代の歩き方 254

映像の中に封じ込められた戦争 - 当事者性の不在

世界貿易センターの一棟目のビルに飛行機が突っ込んだ映像を偶然、テレビで見た人は、映画の撮影かと思った。十数分後に二棟目のビルに飛行機が突っ込んだときも、映画かと思った。多くの人がそんな感想を口々に洩らしている。あれは映画ではなく、自爆テロの仕業であると知った後も、我々はまるで映画のようなシーンであったという思いをいまだに拭い去ることはできない。すべての出来事を映像として見ることになる現代にあっては、映像は映像であり、映像は映像以外のものではない。あのシーンは映画ではなく、現実の出来事であるとたとえ聞かされたとしても、映画のワンシーンとすでに受けとめている感覚を変更するには至らないし、敢えて変更する必要がない場所に我々は立っているのではないだろうか。

つまり、こうである。映像の中でしか見たことのないニューヨークの世界貿易センタービルが、映像の中で破壊されているのを見たとしても、それはすべて映像の中の出来事でしかない。映像の中の出来事ではなく、実際に攻撃されている場面が映像化されているだけであるのに、我々のお茶の間に映像として届けられるときには、現実の出来事であろうと映画であろうと、すべて映像の中の出来事として送られてくる。もちろん、我々はその映像について、ニュースか映画かを識別しながら見ている。ニュースであるなら現実の出来事であるし、映画ならオープンセットであるくらいは認識している。だが、すべてが映像の中の出来事として封じ込められてしまっているという事実が、現実の出来事であるか映画であるかの区別をそれほど重要視しなくなっている。崩壊していくビルから次々と人々が飛び降りていく映像が現実であるか、映画であるかという違いに、我々はそれほど注意を払わなくなってしまうし、鈍感にすらなってしまうのだ。

攻撃された世界貿易センタービルの周辺に居住している人々にとっては、いうまでもなく現実の出来事は映像の中に収まらずに、毎日見慣れている風景の変更、あるいは喪失、破壊として見舞っている。少なくとも現場には言い知れぬ痛覚が渦巻いている。風景が破壊されたことによって、その風景の中で住み慣れてきた人々も共になにかを破壊されてしまったといえる。事件現場とはそういうことなのだ。ところが、現場（性）を脱色されてしまっている映像の中の本当の出来事は、「映画のような刺激的な映像」として視聴者に伝えられていくにすぎない。受け手はその映像を眺めるけれども、ただそ

れだけのことである。すべては映像の中の出来事にすぎないのだ。要するに、現場では人は存在することができて、映像の中に封じ込められた本当の出来事のなかであろうとも、映画と同様に人は存在することができないのだ。

「世界はかように動揺する。自分はこの動揺を見ている。けれどもそれに加わる事は出来ない。自分の世界と、現実の世界は一つ平面に並んでおりながら、どこも接触していない。そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにして行ってしまう。甚だ不安である。」 - 辺見庸が『サンデー - 毎日』(01・10・28)の連載エッセーの冒頭に抜き書きしている夏目漱石『三四郎』の一節である。漱石の時代からほぼ百年を経過して、文明が進むなかで現実の世界から自分が置き去りにされていくという、漱石が感じた「不安」はだが、現在の我々にはすでに無縁となっている。そのような「不安」をはるかに通り越して、我々は現実の世界に加わることを考えずに、映像の中に封じ込められている現実の世界をただ見るだけの存在と化してしまっているからだ。

世界貿易センタービルの崩壊を映しだした映像は一カ月後には、アメリカ軍によるアフガン攻撃の映像へと移っている。しかし、ここで不思議なことを考えないわけにはいかない。アメリカ軍による攻撃のとばっちりを受けているアフガンの人々は、高層ビルに旅客機が突っ込み、崩れ落ちていくあの惨状を、少なくともテレビ映像では見ていないだろう。ラジオでその遠くの情報を入手しているとしても、テロに対する報復攻撃が自分たちのいま住んでいる場所にむかって行われる可能性があり、現に一カ月後には攻撃が行われたことを、この人たちはどのように受けとめているのだろうか。テロに遭遇した人々が味わったにちがいない不条理を、アフガンの人々も相次ぐ戦争の不条理の真っ只中で、更に自分たちに身に覚えのないテロに対する報復攻撃に晒されるというかたちで味わわなくてはならないのだ。

アフガニスタンにテレビがないのは、「偶像崇拜はイスラムの教えに反する」として、イスラム原理主義のタリバン政権が、テレビ放送を禁止してしまったからである。同じ理由でこの春、バーミヤンの大仏も破壊された。イスラム世界でもテレビすら認めないのはアフガニスタンだけであるが、タリバンが政権を取る以前からテレビは都市部にしかなく、見る人も限られていた。住民の多くは昔からラジオを聞いて情報を得ており、公式発表を流すだけで当てにならない国営ラジオではなく、毎日4回、現地のパシュトゥー語でニュースを流している英国のBBCのラジオ放送に絶大な信頼を寄せている。

テレビを見られる人々と見られない人々の差はどこにあるのだろうか。テレビを見られないアフガンの人々は、自分たちが撮影されていても、当然その映像を見ることがない。つまり、テレビに映しだされている本人たちがその映像を見られないのに、テレビに映しだされていない膨大な人々がその映像を見ているという構図が、そこに浮上している。このことは、アメリカ軍の空爆に晒されて多くの死傷者を出し、甚大な被害に見舞われ

て難民化していく、当事者であるアフガンの人々はその映像を見ずに、戦場から遠く離れて普通の日常生活を送っている、当事者でも何でも膨大な人々が映画を見るように、映像化されたその光景を見ているということの意味する。テレビにもし文明が象徴されているとするなら、文明とは現実の世界で起きている戦闘行為や、その戦争によって取り返しのつかない致命的な損傷を負わされていく現実の悲惨な光景を映しだしたテレビ映像を、お茶の間でご飯を食べながら、アルコールを飲みながら、映画を見るように平然と見ることができるようになった時代の到来を指しているといわねばならない。

古代ローマに5万人収容のコロセウムで、奴隷たちをどちらかが倒れるまで闘わせる競技があった。ローマ市民は目当ての奴隷に賭けて、その死闘を楽しんだのである。文明が進んでそのような野蛮な競技はもはや見られなくなったけれども、その代わりに文明はテレビを生みだして、現実の戦闘場面を映像の中で居ながらにして鑑賞できるという現代のコロセウムを、地球の果ての隅々まで行き渡らせた。古代ローマのコロセウムでの死に至る格闘技を観覧することが野蛮であるといま感じているなら、現代の映像化されたコロセウムでの殺戮が繰りひろげられる戦闘シーンを鑑賞することも、同様に野蛮である筈だ。なるほど古代ローマでは目の前でおびただしい血が流され、死闘の残酷さは生々しく、それ故に異様に高ぶった興奮が見物人から引き出されたことであろう。現代の映像では極力血なまぐさいシーンは避けられているので、映像をそのまま見ている限りでは残酷さは少しも感じられない。もちろん残酷さは放映されていないだけで、残酷さが感じられないから残酷でないわけではない。

古代ローマでは目の前で残酷なシーンが繰りひろげられたが、現代では残酷な戦闘であるのに、その場面は敢えて放映しないように抑制されているのだ。残酷な殺戮を残酷ではないように放映することで、世界中の良識ある人々の憤懣を買わないようにしたいのである。砲撃されて頭が吹っ飛んだり、手足がもぎ取られ、全身血だるまの状態での多くの人が息を引き取っていく酸鼻な光景に満ち満ちているのが戦場であるのに、映像はそんな残酷な場面をけっして映しださずに、砲弾が暗闇の中で花火のように飛び交っている幻想的なシーンや、家屋を爆撃されて、住む処を失い、父親を失い、悲嘆に暮れている一家の地獄のような惨状を映しだして、戦争の残酷さをしきりに強調するのだ。あたかも戦闘シーンを放映するテレビの真の役割は、民間人にまで被害を及ぼす戦争の罪悪を映しだすところにあるといわんばかりに。

世界貿易センタービルへの飛行機の突入を映しだし、テロ現場にカメラを持ち込み、そしてアメリカのアフガン攻撃を放映するテレビは、暴力である。どのような場所をも映像化してしまうテレビは、暴力そのものである。残酷な場面を映しだすから暴力なのではなく、残酷な場面を隠されたものにするから暴力なのだ。本当に残酷な場面を回避し、隠蔽するテレビ映像は、現場から鋭く投げ返されている問いを回避し、隠蔽するこ

とにおいて、更に現場性の脱色を自明視し、特権化しているが故に、暴力なのである。それを見ている我々もまた、どんな問いにも巡り合うことなく、一抹の話題や情報として消費していただくだけであるので、充分暴力であると思う。我々は仕向けられたテレビ映像の前では、人間であることからどんどん遠ざかっているように思われてならない。

《82年、レバノン。イスラエルの侵攻にともない、9月16日から18日にかけて、ベイルートの二つのパレスチナ難民キャンプ、サブラーとシャティーラでイスラエル軍に支援されたレバノン右派勢力に、2千人を越える難民たちが虐殺された。さらにその6年前の76年には、ベイルート郊外のタッル・ザアタル難民キャンプがレバノン右派勢力に半年間にわたり包囲封鎖され、集中砲火を浴び、2万人いた住民のうち4千人が殺されたという。

私たちは2001年9月11日ニューヨークを記憶するだろう。人間の歴史に刻まれた悲劇として。「私たち」の出来事として。しかし、1976年タッル・ザアタルの名を、1982年サブラー、シャティーラの名を記憶する者はほとんどいない。それはなぜなのか。それらの出来事は、パレスチナ人が記憶すべきパレスチナ人の出来事であっても、私たちが人間の歴史として私たちの記憶に刻む「私たち」の出来事とは、一般には思われていない。

ニューヨークでビルに閉じ込められ不条理に死んでいった者たちの死を「私たちの」出来事として悼む、その同じ私たちが、難民キャンプに閉じ込められ無差別に殺戮され続けるパレスチナ人の死は、私たちが記憶すべき「私たちの」歴史の外部にある出来事であるかのように無関心でいる。まるで、難民キャンプで難民が殺されることは彼ら難民の条理であり、人間が被る不条理ではないかのように。そして、昨年9月以来、パレスチナ人は自治区というゲットーに再び閉じ込められて、砲撃され、殺されている。

ある者たちの出来事が、私たちが「私たちの」経験として分かち持つ、人間の「普遍的な」出来事として語られる一方で、別の者たちが被る出来事は、私たちには関係ない、特殊な人々の特殊な経験として、私たちの関心の埒外に棄ておかれる。

記憶の「経済学」におけるこの圧倒的な、暴力的なまでの不均衡、記憶の偏在。テロルを生み出す温床として、南北間経済格差が指摘されているが、この記憶の偏在と地球規模の富の偏在は、同じ一つの暴力的な構造に由来している。》

京都大学助教授の岡真理は『朝日新聞』(01.10.29)にそう書き、その「同じ一つの暴力的な構造」からテロが噴出することを示唆する。彼女は《報復の論理を断ち、暴力の反復に終止符を打つために》、我々の記憶の埒外にすておかれている人々の《出来事を「私たち」の経験、人間の歴史として、私たちの記憶に刻み込まなければならないという。だが、どうやって記憶に刻み込むのか。暗記すればよいということではあるまい。彼女は自分が現代アラブ文学を専攻していることから、パレスチナ難民の

現状にどうしても視線が尖るという特殊事情を見逃してはならない。彼女の指摘は正当すぎるほどだが、我々がニューヨークの死者について『私たちの』出来事として悼むのは、同じ文明の一員として意識されているからである。要するに、隣人と思われているからだ。映画やテレビ等の映像を通じて、一度も訪れたことがないニューヨークへの親近感を刷り込まれてしまっているのである。

しかし、本当はそんな問題ではない筈だ。我々日本人は確かにパレスチナ問題を記憶の埒外に棄ておいているが、だからといって、ニューヨークの死者を自分たちの記憶に刻み込んでいるわけでもない。情報の量による圧倒的な不均衡の問題に帰せられる面が大きい、その基底で問われているのはやはり当事者性の不在という問題であろう。《アメリカ同時多発テロといういまはすぐにでも出てくるこのことばを、事件に関連する人名を、9月11日という日付を2、3年もすればぼくは忘れてしまい、思い出せなくなるだろうと、思う。(中略)事件が大きな、複雑なものであればあるほど人は忘れていくのだとみてまちがいない。ぼくは、この同時多発テロは、まもなく人々に忘れられるだろうと、9月11日のテレビを見たあとで思った》と、現代詩作家の荒川洋治は『産経新聞』(01.11.4)に書いている。

人は忘れていくだろう。時間がたつと忘れていくというよりも、事件が起こった9月11日のテレビを見ているその瞬間から忘れつつあるというべきだろう。つまり、我々は記憶するためにテレビを見ているのではなく、忘れるためにテレビを見ているのだと思う。テレビは巨大な忘却装置なのである。なぜテレビを見るその先から忘れていくのかははっきりしている。テレビに映しだされている事件現場とテレビを見ているお茶の間とのかかわりが断たれているからだ。別のいいかたをすると、映像を見ている者はどんな主体にもなりようがなく、したがって、主体がないところに現場も当事者性も迫り上がってくることはない。我々は見ているテレビ映像を忘れ去っていくだけではない。やがて我々は我々自身のことも忘れ去っていくのかもしれない。自分が自分に対して当事者性の意識を見失ってしまうとき、そうなるのは避けられない。

荒川洋治がいうように、アメリカ同時多発テロも、いま起こっているアフガン攻撃も、これまでの大きな事件同様、忘れていくのであればそれはそれで仕方がない一方で思っている。自然の風化に埋没する勢力には誰も逆らえない。しかし他方で、それでいいのか、そんな生き方でいいのかという気持ちが渦巻いている。岡真理が指摘していたように、忘れていくことのうちに根を張る「暴力的な構造」から目を背けてはならないし、だいいちグローバル化を押し進める世界から忘れ去られたパレスチナやアフガンの地域から今回のテロが発生したとするなら、忘れ去ろうとする関係性総体が蓄積していく暴力とたたかうためにも、忘れてはならない関係性をつくりだし、生きていく必要があるだろう。当事者性の不在が生現場の喪失に直結しているなら、その直結の輪の中に

すべてを、そして自分自身を忘れ去っていく構造が見出せるにちがいない。忘れないために忘れないように努力するのではなく、忘れようとしても忘れられなくなってしまう当事者性の位置に立つことが、どこかから求められているのだと思う。現場性を深く喪失しながらさ迷うほかない現代の我々が、自分にとっての現場性を見出すためには、いったんあらゆる既成の場所から遠く離れて、問題の当事者性の位置をまずは確立する以外にない。そして当事者性としての現場をつくりだしていくことだ。その当事者性としての現場に立って、いま起きている事態を見つめ直さなければ、テレビ映像の洪水の中で我々の誰もが溺れ、他者どころか自分自身すら忘れ去っていくほかないだろう。

2001年11月15日 記

[TOPに戻る](#)